



大阪商業大学 FD ニュースレター

第3号

2009年2月発行

授業アンケート集計結果について

総合経営学部 公共経営学科 准教授 松永佳甫

今年度に実施した授業アンケートの集計結果では、平成19年度に行った授業アンケート集計票に関する教員の方々からのフィードバックを反映させるべく、次の3点について改良を試みた。まず1点目は、語学と語学以外の科目に分けた統計処理である。これは、語学をご担当されている教員の方々より、語学と社会科学系科目とは性質が大きく異なるため、別々に統計処理すべきであるという意見が出されたことを反映しての改良である。2点目は、レーダーチャートを廃止し、これに代わり平均値からの乖離を示す棒グラフを採用したことである。これは、レーダーチャートは見づらいという意見を反映したものである。代替すべきグラフについてワーキングで検討した結果、平均値からの乖離を示す棒グラフを採用することになった。3点目は、平均値だけでなく偏差値も記載したことである。これは、平均だけではそのデータの性質を把握できないという意見を反映しての改良である。一般にデータの性質を把握するためには、平均と分散の両方を必要とすることから、私たちに馴染みの深い偏差値を記載することにした。

以上の改善を試みて、今回のアンケート集計結果についてのみではあるが、次の2点が観察できた。まず1点目は、語学のみ平均とすべての科目を含む全体平均との差が、極めて小さいということである（青と紫の棒グラフの高さがほぼ同じ）。これは偏差値に関しても同様のことが言える。このことは語学と語学以外に分けた集計を行うことが、今後必要であるのか見極める一つの判断材料となろう。2点目は、縦棒グラフが平均値を境に大きく上下するような傾向があまり見られないということである。例えばアンケート調査項目Q1に対応する縦棒グラフの値が0.5であるとき、アンケート調査項目Q2、Q3、…、Q13それぞれに対応する棒グラフの値もおおよそ0.5の近傍にある傾向にあるということである。縦棒グラフがすべて平均値より上に来たり、すべて下に来たり、あるいは平均値あたりに集中している様子をご自身の授業アンケート調査結果票に観察できる教員の方々は多いのではないだろうか。これには、いろいろな要因が考えられそうであるが、各アンケート調査項目の内容が回答の相関を誘発するような特色を持っているということなのかもしれない。

今後の課題としては、教員の方々からご提出いただいた平成20年度後期授業アンケート集計結果票に関するフィードバックに則って、授業アンケート調査項目および授業アンケート集計結果票を、よりインフォーマティブなものへと改良して行くことである。また集計データを複数年蓄積し、時系列データによる集計結果票の作成も今後の課題の一つとしてあげられる。



■目次■

- P. 1 授業アンケート集計結果について
公共経営学科 准教授 松永 佳甫
- P. 2 2008年度でのFD委員会活動
経済学部 教授 前田 啓一
- P. 3 研修会参加報告①
＜京都大学 WEB公開授業研究サブ・グループ
(関西地区FD連絡協議会)に参加して＞
公共経営学科 講師 横見 宗樹
- P. 4 研修会参加報告②
＜「思考し表現する学生を育てる
—書くことを指導し、どう評価するか—」＞
経済学部 准教授 新宮 潔
- P. 5 研修会参加報告③
＜流通科学大学
第2回特色ある大学教育支援プログラム
(平成19年度)採択記念シンポジウム
『公開授業の現状と課題』＞
経営学科准教授 林 妙音
- P. 6 大学院「修士論文中間報告会」開催される
商学科 教授 南方 建明
- P. 7 「フィールドワークゼミナール」
(フィールドワーク型授業)の試みについて
経営学科 准教授 桑野 博行

■2008年度でのFD委員会活動

経済学部 教授 前田 啓一

FD委員会の活動が2年目を迎えた。今年度も、本誌冒頭の松永先生の説明にもあるように「授業アンケート」を行ったし、若干の改善点も付加することができた。また、自己点検・評価ワーキンググループでは将来における報告書等の構成のあり方についての検討を進めている。大学院FD検討ワーキンググループでも今のところ修士論文の中間報告会を充実させる方向である。さらに、本年度においてはあらたに4回の公開授業を実施することができた。公開授業の担当教員・対象科目・公開方法など多くのご意見が寄せられているので本委員会ではそれらを真摯に検討し、来年度もいっそう発展した内容でこれを進めていきたいと思う。また、懸案であったFDニューズレターも、簡単な体裁ながら今回で第3号となる。本委員会の対象範囲はきわめて広く、時間や手間のかかることが予想される。教職員皆さんのご支援とご協力を心よりお願いする次第である。

なお、年度内に行われたFD関係の会議・研修会のテーマ・参加者等は次の通りである。

日時	テーマ等	主催	場所	参加者
2008.7.23	大学関西フォーラム 第13回懇話会 「学ぶ力を育てるために」	読売新聞社 大阪本社	クラブ 関西	前田啓一
2008.10.27	授業評価研究SG 第1回会合	関西地区FD連絡協議会	京都大学	宍戸邦章
2008.11.14	京都大学WEB公開授業研究SG	関西地区FD連絡協議会	京都大学	横見宗樹
2008.11.19	大学の教育力 企業の人材育成向上を考える	(財)関西生産性本部	ロイヤルNCB3F	前田啓一
2008.11.29	思考し表現する学生を育てる —書くことを指導し、どう評価するか—	関西地区FD連絡協議会	立命館大学 衣笠キャンパス	新宮 潔
2008.12.8	関西地区FD連絡協議会 研究WG出欠確認SG	大阪成蹊大学	大阪成蹊大学	影山・前田 (教務課)
2008.12.13	学士課程の体系化に向けて	龍谷大学教育開発センター	龍谷大学	前畑安弘
2008.12.23	第2回特色ある大学教育支援プログラム (平成19年度)採択記念シンポジウム 「公開授業の現状と課題」	流通科学大学	流通科学大学	林 妙音
2009.2.16	関西地区FD連絡協議会 研究WG出欠確認SG	大阪成蹊大学	大阪成蹊大学	影山・前田 (教務課)

■研修会参加報告①

＜京都大学 WEB 公開授業研究サブ・グループ (関西地区FD連絡協議会)に参加して＞

総合経営学部 公共経営学科 講師 横見 宗樹

透き通るような寒さに本格的な京都の冬到来を感じる11月の初旬、少しばかり身体を温め、あわよくば日頃の運動不足の解消になればと、哲学の道を少々の回り道しながら京都大学の吉田キャンパスに向かった。関西地区FD連絡協議会の京都大学WEB公開授業研究サブ・グループの会合に出席するためである。

WEB公開授業とは、インターネットを介して大学の授業を公開することである。なかでも、京都大学が開発したシステムは特筆すべきものである。このシステムは、授業をカメラ撮影したものをWEBに公開し、掲示板を通じて評価を実施する試みである。具体的には、教室の前後2箇所のカメラとマイクが配され、教員と黒板、それに受講生の表情も捉えることができる。また、音声はステレオにより左右を独立して聞き分けることが可能である。これは、グループディスカッション形式の授業で効果を発揮する。すなわち、左右の音声をミックスして聞けば教室全体のワイワイガヤガヤという雰囲気、また左右のいずれかに音声ダイアルをひねれば、各グループが話している内容を詳らかに聞くことができるのである。

また、WEB上の授業画像および授業内容を評価する掲示板へのアクセスはパスワードで保護され、授業評価を実施する教員以外のアクセスを遮断することが可能である。掲示板は各公開授業の回ごとに一定期間のみ利用することができる。

こうしたシステムは、2006年頃より試験的に開始された。当初は京都大学と島根大学のみ参加であったが、その後、山形大学と大分大学も加入している。当初の参加人員は30名程度であったが、現在では50名程度に増加しているようである。

さて、私が今回参加したWEB公開授業は、2008年10月27日～11月10日までの期間限定で公開された島根大学の橋本哲准教授の「森林水文学」である。この授業の特徴は、通常は講義形式で実施する内容でありながら、グループディスカッションを導入していることである。受講生は30名程度であるが、撮影用に特別に机を寄せて配置しているためにWEB画面上では全ての受講生を見渡すことができる。

授業では最初に講義形式で所定のテーマについて解説し、引き続いて、事前に課しておいた課題に対してグループディスカッションをおこなう形式である。授業者(橋本先生)は随時教室を巡回しながら、ディスカッションを円滑に進めるためのヒントや発問を受講生に与えていた。

一方で、授業評価をおこなうWEB上の掲示板では、主に授業内容に始まりカメラ配置や音声の拾い方などの技術面に

至るまで、実に広範囲な内容の議論が繰り広げられた。この掲示板には1週間に27件の書き込みがあったということである。掲示板のツリーを辿ってみると、特定のメンバーに偏らず、多くのメンバーによる参加がみられ、授業者はひとつひとつの書き込みに対して丁寧にレスポンスを返していた。

こうしたWEB公開授業のシステムに関して、サブ・グループの会合では、今後の改善点と検討課題に関する議論がおこなわれた。まず改善点としては、以下の2点が指摘された。

(1) 公開対象の授業について、ポイントを当てて議論をする

先にも述べたように、今回のWEB公開授業の掲示板では、授業内容からカメラ配置などの技術的なことまで、議論の範囲が広がりすぎた感がある。そこで、たとえば「グループディスカッションの効果について」や「大人数教室の授業について」など、テーマを絞って掲示板の議論をしたほうが良いという意見が出された。

(2) WEB映像をライブラリー化すると良い

このWEB公開授業は、まだ実験的な側面もあることから、WEB映像は一定期間の経過後に削除されてしまう。しかし、WEB映像をストックしていくことで、各自の興味あるテーマの授業をいつでも閲覧できるようになるという意見が出された。

つづいて今後の検討課題としては、以下の2点が指摘された。

(1) 肖像権の問題をどうするか

公開授業のWEB画面へのアクセスにはパスワードがかけられているとはいえ、受講生の肖像権の問題が懸念されることから、京都大学のケースでは事前に承諾書を取っている。それに加えて、サブ・グループの会合では、大学1年生は未成年なので両親の承諾が必要ではないか?という疑問が呈された。

(2) 担当教員が掲示板に返信することが負担に

今回のWEB公開授業では授業者の先生が掲示板の書き込みに対してひとつひとつ丁寧に返信されておられたものの、たくさん書き込みに対して、この作業は大変なものとなること懸念される。

このように、授業公開のツールとしてWEBを利用することには数々のメリットがある反面で、WEBならではの課題も残されている。さらに私にとっての課題がひとつ。それはカメラとマイクに囲まれて授業ができる「度胸」が試されることである。

■研修会参加報告②

<「思考し表現する学生を育てる

—書くことを指導し、どう評価するか—>

経済学部 准教授 新宮 潔

11月最後の週末の土曜日、立命館大学において関西地区百校余りが参加するFD連絡協議会シンポジウムが上記のタイトルで開催されました。

代表幹事校代表挨拶、連携企画部責任校代表挨拶に続き、司会者挨拶とパネリストの紹介と進行し、6人の先生方の発表が行われました。以下は各発表について、私の印象に残った点などをまとめたものです。

神戸常盤大学保健科学部教授、専門は東洋史の大野仁先生のお話は、臨床検査士や看護師の国家試験合格を第一義とする大学にあって、まずそこにいたるまでの勉強をどのようにすべきかを指導することから始めるという内容でした。具体的にはノートのとおり方から試験の準備方法までを、専門の異なる教員がほぼ全員で指導するとのことでした。したがって、専門が異なる教員の間での「連携」の重要性とチームワークの大切さが強調されていたように思います。

続いて立命館大学文学部副学部長、米山裕先生は、定員千名をこえる文学部新生の文章指導について、TAと担当教員による添削指導と成績評価の現状など、詳細に説明をいただきました。そのような指導が目指すところは、学部生全員に課せられている8単位の卒業論文の作成ですので、1年生対象と考えると、かなりレベルの高い目標設定になっているように思いました。すでに修士論文を書いた博士後期課程のTAによる、きめ細かな文章チェックと添削というシステムが構築されていることは驚きであるとともに、学生レポートの表紙に示された文章評価基準は大いに参考になりました。



3人目は関西大学化学生命工学部教授、池田勝彦先生。理系の学生の卒業研究の実験レポートが、日本語のチェックに終始し、肝心の実験内容の評価以前に終わらないようには……という観点から、彼らの活字離れに対していかに取り組むかが実例をもって説明されていました。「読むこと・書くこと」を体験させるために、「まずはセラミックの実物を手に取らせ云々」と始まったのですが、これは我が大阪商業大学の学生に一番当てはまるような気がしました。このセラミックの実物を、実際の社会現象や社会問題の映像等に置き換えて、つぎにそれに関連する参考文献の「日本語」文を繰り返し音読させ、その日本語の意味が理解できるということを体験させるというのです。正しく書くためには正しく読むことが必要……当たり前のことなのですが、これが日本語の文献を対象とした内容であったことが新鮮でありました。

さて、休憩時間をはさんで「コピペ（コピー&ペースト）」問題に関する、金沢工業大学大学院教授、杉光一成先生のお話です。先生が開発されたという、コピペ論文を見破るソフトについての説明ではありましたが、そもそも何らかの資料に基づいて作成された文章に他人の文章が取り込まれているのは当然で、どの程度までが許されてどこからがNGなのか。かぎ括弧に入れられて「引用」されていればどうなのか、という前提が明確でなければこの問題を論じることは困難であるというお話から始まりました。ここでは、PCの画面上の操作テクニックで、5分もあれば規定文字数に達するレポートが完成してしまうという「超手抜き」をどこまで問題視するのかということなのですが、それも立派なITテクニックではないかとか、せめて「手書き」であれば許されるのか、いろいろと議論の余地があるそうです。

続いて発達臨床の立場から、大阪市立大学大学教育研究センター准教授の西垣順子先生。内容は「〈書くこと〉で学生はどう育つのか」というタイトルに言い尽くされているように思います。そして最後に〔指定討論〕として、桜美林大学心理・教育学系教授、井下千以子先生の「Writing Across the CurriculumとFD—書く力考える力を育む学士課程カリキュラムを目指して」という、アメリカ心理・教育学の見地によるお話があり、後に質疑応答がなされました。

以上が今回のシンポジウムの概略です。なお、字数の都合上質疑応答に関する報告は割愛させていただきました。ご了承をお願いします。

■研修会参加報告③

＜流通科学大学

第2回特色ある大学教育支援プログラム

(平成19年度) 採択記念シンポジウム

『公開授業の現状と課題』>

総合経営学部 経営学科 准教授 林 妙音

昨年(2007)の12月23日に流通科学大学で「公開授業の現状と課題」を題とするシンポジウムが開催された。当日、同大学の教育高度化推進センターの南木睦彦先生と京都大学高等教育研究開発推進センターの酒井博之先生がそれぞれ自らの勤務校での公開授業制度の実施状況について報告を行った。本学の現在のFD活動の進捗状況からして、流通科学大学での公開授業や授業改善の経験が最も身近に応用できるものと思われるので、ここでまず南木先生の報告に焦点を当て、その概要を紹介してみたい。

流通科学大学では2003年度後期より独自の全学的授業公開制度(オープンクラスウィーク OCW 制度と略称)を実施し始めた。その詳細はFDニューズレター第1号の論考を参照していただきたいのだが、当該制度は現在多くの大学で採用されている授業公開方法と比較すると次の四つの利点を持っていると、主催校側が強調している。まず、高い公開性と透明性を持つこと。そして、短期間で規模の大きい「公開」と「参観」を体験することができること。また、電子システムに支援されて運営が簡便であることと、システム上で成果報告書を作成されるので、事例が自動的に蓄積されるという四点である。

さて、肝心なのはこのような優れた授業相互参観制度の実施によって、教育現場では実際にどのような成果を挙げられたのか、またどのような課題が新たに見えてきたのかということ。流科大の場合に最も顕著な成果は出席率が向上したことと低年次の退学者数が減少したことである。また、卒業時にとったアンケートの統計結果を見ると、四年間受けられてきた授業やカリキュラムに対して「満足だ」という回答を出している学生数は2005年度以後毎年全体の5割以上を占めていることが分かり、これも同大学での公開授業などのFD活動の実施による成果の一つと見ることができよう。

ただし、入学年度別の授業満足度や理解度の推移はやや複雑で、そこから今後取り組んでいくべき新しい課題が見えてくるかもしれない。つまり、2002年度と2003年度の入学生の満足度は低年次には低かったが、3年後期より大きく上昇した。2004年度と2005年度の入学生の満足度は低年次から比較的高く、しかも年次が上がるにつれ、少しずつ上昇した。ところで、2006年度と2007年度の入学生になると、低年次時の授業満足度は再び低下に転じるようになり、これで低年次生の授業に対する満足度・理解度向上の問題、言い換え



ば初年次教育のあり方はどう改善したらよいかという新たな課題が浮かび上がってきたのである。

基礎学力が低い、もしくは学習意欲が希薄な新生の増加による学内の学力格差の拡大を防ぐために、流科大はまず一年前期の開講科目や開講コマ数を増やし、教員の個別指導が行き届けるような小人数講義を増設して、カリキュラム編成上の工夫を行った。そして、入学前教育も導入された。学習支援センターと連携して新生の学力をきめ細かく把握する上で、入学を備えるための各種の学習グループを立ち上げている一方、一年後期から各種のチャレンジプログラム、能力別クラス、特別クラスなども配置されるようになったのである。

もちろん、流科大のようにFD制度の精緻化を通して授業改善を進めていくというのが一つの方向である。ただし、個々の授業における授業方法や内容の改善こそ初年次教育を始め、全学レベルの教育内容を充実させるための最も重要で基本的な課題であることは改めて述べる必要もないであろう。商大の場合のように自己点検評価や授業アンケートの実施を通して、教員個人の自主性を喚起し、授業改善に繋がる各々の裁量的工夫を促すのは従来の伝統的方式である。ただし、個人の力が微小であり、身内同士だけ集まる小グループ内での意見交換も狭い視点にとらわれてしまう嫌いがある。この方式では、授業改善に費やした時間や工夫が常に生産性の低いものと思われる先生も少なくないであろう。

いずれにしても、「良い授業」はどんなものなのか、学生からより高い学習効果を引き出すにはどうしたらよいか、これらの授業改善における基本的な問題意識を共有し、その課題の達成に近づくには、流科大のように全学的授業参観制度を導入することが一つの有効な方法かもしれない。例えば、授業アンケート評価の高い授業をいくつか選定し、一定期間中に全学の教員がそれを参観して、その後学内WEB上で参観の感想や意見を相互に交流できるような新しい制度を立ち上げてはどうかと思う次第である。

■大学院「修士論文中間報告会」開催される

総合経営学部 商学科 教授 南方 建明

平成20年11月1日(土)10時～14時50分まで、本学423教室において「修士論文中間報告会」が開催された。今回の報告会は、6月(前期修了希望者対象)に続いて今年度2回目、報告者は11名、教員・大学院生ら約40人が参加した。報告者の氏名および論文テーマは、別表のとおり。

別表：平成20年度 大阪商業大学大学院 地域政策学研究科

「第2回修士論文中間報告会」報告者一覧

氏名	指導教授	論文テーマ
浅岡 朝泰	塩田真典	「サッカーによる地域振興－便益帰着構成表を用いたプロサッカーチーム(文化事業)によるホームタウン(地域)への効果分析手法の提案－」
王 新征	中橋國藏	「日系企業の中国進出における経営の現地化」
屈 芳穎	武城正長	「中国国内物流における日系企業のSCM、3PL」
黄 璋	上原一慶	「現代中国「格差」の実態－中国農民工を中心に－」
其仁丹巴	大橋正彦	「日・中におけるクチコミの現状と実践事例」
程 華	大橋正彦	「“CSR”をめぐる促進・障害要因と諸課題」
范 飛	中橋國藏	「旅行会社における新規事業の展開－JTBの事例分析－」
洪 承完	瀧澤秀樹	「韓米FTA交渉の成立と今後の展望」
森本恵一朗	石上 敏	「『ウルトラマン』の創作過程に見る地域性の考察－金城哲夫を中心として－」
林 曉燕	石上 敏	「中国の住宅産業化－その沿革・方向および経済効果－」
清水一二三	初谷 勇	「市町村保健師の専門職性と政策形成への参加」

大学院地域政策学研究科では、平成20年度から新たに「経営革新専攻」を開設、経済学を基盤とした既設の「地域経済政策専攻」と、経営学および商学を基盤とした「経営革新専攻」の両専攻が教育研究面で有機的に連携することにより、地域社会、経済社会から発せられる要請に応えていくこととした。

「修士論文中間報告会」は、これまで院生が自主的に実施してきたが、平成19年度からは地域政策学研究科の公式行事

として位置づけ、大学院担当教員および院生の全員参加を原則としている。経営革新専攻は現在1期生が修士課程1年生のため、今回の報告者は全員が地域経済政策専攻の院生であったが、地域経済政策専攻の教員・院生はもちろんのこと、経営革新専攻の教員・院生も参加して実施された。



同報告会は、院生が研究の進捗状況と論文の骨子を報告する機会をもつことにより、より優れた修士論文の作成に向けて自己研鑽をつむとともに、演習指導担当教員以外の教員から研究上の示唆を得ることを目的としている。同時に、教員相互に院生の研究指導方法について意見を交換し、研鑽を図る重要なFD活動の場として位置づけている。

報告会では、論題の設定に至る問題認識、研究によって立つ学問的基盤、論題にかかわる用語の定義、実態調査の方法など、次々に疑義の指摘や研究上の示唆がなされ、活発な質疑が行われた。休憩時間を除いて、実質約4時間にわたる報告会であったが、報告者が11人と多数なため、1人あたりの報告時間・質疑時間は限られたものであった。しかし、昼の休憩時間や報告会終了後も、教員相互、また演習指導担当教員以外の教員と院生との間で熱心に意見交換がなされていた。



「大学院FD検討ワーキング」では、このような研究報告会を大学院のFD活動の大きな柱として位置づけ、より一層の充実を図っていきたいと考えている。

■「フィールドワークゼミナール」 (フィールドワーク型授業)の試みについて 総合経営学部 経営学科 准教授 桑野 博行

1. 「フィールドワークゼミナール」のねらい

演習Iを担当する教員の一部で、「フィールドワークゼミナール」(以下「Fゼミ」とする)を次年度から開講することになった。いうまでもなくフィールドワークとは地域調査であるが、今回のゼミナールでは調査することだけにとどまらず、後述するように様々な能力を習得しようとするものである。ここではその授業の目的やねらい等について述べてみたい。

この「Fゼミ」の目的は、①大学で習得してきたスキルを活用し、実践を通して創造性、判断力、行動力の向上をめざす、②フィールドでのヒアリング調査、イベントの企画立案などといった経験を通して、社会で評価される現状分析能力、企画提案能力、問題解決能力の向上を図る、③他人と協力しながらプロジェクトを動かしていくことで“協調性”を身に着ける、④社会人との対話を通してコミュニケーション能力の養成と多様な価値観を許容する力を身につける、⑤実践的課題に取り組むことで、実社会での活動経験を蓄積する、ことにあると考えている。

2. 今年度の「フィールドワークゼミナール」(フィールドワーク型授業)

私事で恐縮だが、すでに演習1桑野ゼミナールでは、ここ3年間ほど「Fゼミ」に類似する取組みをおこなってきた。今年度は大阪市平野区の異業種交流グループ「フィールドコア平野」(以下、FC平野とする)の経営者の方々から、彼らが作成した「万華鏡組み立てキット」の新しい活用方法について、というテーマをいただいた。以下では演習1での取組みをもとに「Fゼミ」の流れを説明しよう。

まず演習の課題として取組むに当たりFC平野の方々と4月に打合せをおこなった。ゼロからのスタートであるとする時間がかかるため、彼らの製品を「改良する」という方向で、万華鏡というテーマに決定した。

次に、万華鏡について基本的な知識がないため、鏡や万華鏡について事前学習をしたうえで、7月にFC平野の方々にお越しいただいた。メンバーである鏡メーカーの社長様から鏡について講義をしていただいた後、万華鏡キットを実際に組立てた。その際、各グループにFC平野のメンバーの方々からお願いいただき学生と話をしながら作業をすすめた。組立後、FC平野の方々から、万華鏡キットに関して「改良すべき点はどこか」「誰に、どの様な方法で販売するのか」という課題をいただいたのである。

後期の授業では、この課題を元にグループごとに、自分たちなりの製品の改良点と販売方法についての取組みを始めた。9月中旬にアイデアをまとめ先方に送り、10月にコメン

トもらった。その後、コメントを元に企画案を修正し、11月にはFC平野の方々をお招きし、修正した企画の発表会を行なった。当日は2回目と言うこともあり、双方、活発でより具体的な議論がおこなわれた。そのとき「実際に現場(売り先となる企業・場所)へいってみなさい」というコメントが出てきた。現在、コメントを元に販売(想定)先企業を選定し、実際に商品説明を聞いてもらうためのアポイントメントをとっている段階である。この後は、そこでの反応をFC平野へ返し、試作品を作成しようと考えているところである。

3. 「フィールドワークゼミナール」の成果

今回の演習から得られた成果としては、まず経営者の方々との交流を通じて企業活動のあり方が把握でき、現実社会の動きを知ることが出来たということである。ついでグループで活動したことにより、自分以外の人びとと、特に社会人とのコミュニケーション能力が高まったことである。さらに人前でプレゼンをすることで、考えをまとめ報告する事が出来るようになったということであろう。物足りない点はあるものの、様々な困難をふまえ、自分たちで最後までまとめ上げることで、授業が始まった当初時よりも一回り大きくなった学生を見ることが出来た。また企業経営者の方々からも「刺激になった」「商品に関する新しいイメージができた」とお褒めの言葉もいただいた。

4. まとめ—今後の課題—

このように得ることの多い「Fゼミ」であるが、課題も存在する。まず企業の方々の負担が大きいということである。たとえば私の授業では、経営者の方に2回以上来ていただいている。事前の打合せなどの時間も考えると負担は想像以上に大きく、経営者の方々の熱意に頼っていると云わざるを得ない。そのほか企業にしてみれば具体的な成果を得られるケースは少ないなどの問題もある。また今後は授業への参加に対する謝礼等も考える必要があろう。

次に授業上の問題点としては、グループで活動しているので、成績等個人の評価が難しい、積極的に取り組む学生とそうでない学生がでてくる、授業時間外での拘束が多くなり通常の授業時間では収まりきれないなどの問題もある。また自ずと担当教員の負担が増加することも課題といえよう。

このような問題・課題を抱える「Fゼミ」であるが、実践を通して学生の判断力、行動力、組織統率力を養う点、また大学における新たな地域貢献の一つとして考えるならば、一定の成果が期待できると考えている。

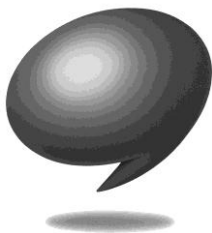
■編集後記■

FD活動についての私たちの取組みも今年度で一通り出揃った気がします。さらに、3月18日には同志社大学社会学部の山田礼子教授による講演「学士課程教育及び初年次教育について」を予定しています。大学のユニバーサル化が進行しているなかで、新入学生の低学力化が顕著になっており、今回の講演により多くの教職員が参加されますことを期待します。

(FD委員会 委員長 前田 啓一)

学年末にさしかかり、教職員の皆様におかれましては、大変お忙しい日々を送られていることと存じます。かく言う私も教務課で多忙な毎日を送っておりますが…

今後もFDおよびSDに関する情報を適宜発信していく所存でございますので、ニューズレターが発行されましたら、ぜひご一読ください。(教務課 前田)



大阪商業大学 FDニューズレター 第3号

発行日：2009年2月25日

発行：大阪商業大学FD委員会

〒577-8505 東大阪市御厨栄町 4-1-10

Tel 06-6781-8816 Fax 06-6781-8438